

自分を生かせる場を歩む

野球解説者・ユーチューバー

里崎智也さん

40年前の徳島、鳴門。子どもが運動したいと思ったら、少年なら野球、少女ならバレーボールが当然だった時代。里崎智也さんも鳴門・大津西小2年のときに躊躇なく野球を選んだ。

「全校生徒の男子120人の半分ぐらいが野球チームに所属していることもあったくらい、野球は男の子にとって身近で当たり前のスポーツでした」

それぞれの町に野球チームがあった。里崎さんが所属していたのは「徳島で一番強かった」。進学した第一中学も強豪校。優勝候補の筆頭に挙げられる常勝チームだった。高校は、鳴門工業（現鳴門渦潮）高校に進学した。ここで出会った高橋広監督の言葉の数々が里崎さんを大きく生かす起点になるようだ。

たとえば、目の前に大小様々な箱がある。そこから一つ選ぶとき、立派な看板を掲げた大きい箱を選ぶか、内容が身の丈に合う箱を選ぶか。

「一番野球の強い学校には、全国から野球の優秀な生徒が集まってくる。そこに入ればそれはすごいことかもしれないけど、そんな環境では自分がどれだけ活躍できるのかわからない。レギュラーにさえなれない可能性だってある」

一番が集まる場を武者ぶるいしながらあえて選ぶか、自分が1番になれる可能性が高い場を選び自分を確実に生かすか。目指す地点は同じでも、アプローチの仕方が違うと結果も違ってくる。

自分が一番になれる場があること、自分を生かせることにこだわる、という里崎さんの「志」はぶれることがない。その裏に見え隠れするのは先の先を見据えた選択をするという思考。

「進路を決めるとき、例えばこの大学を選ぶかとなると、入学後はあれがしたいこれがしたいと、いろいろ希望が膨らむじゃないですか。それが入学の目的になってる人がほとんどですね。でも僕は、その次、選択の次の選択をどうするかを見据えて選ぶ。それを教えてくれたのが高橋監督です」

高橋監督はさらにこうも話していた。「大学に進学できる環境にいるなら、できる限り大学は東京に行け。大学野球も社会人野球も、全国大会は全部東京で開催されているからと。家族にも相談は必要だけど、大学の先の社会人考えたときに、東京の大学の方が圧倒的にチャンスがあるからと言われました」

当時、里崎さんは「どう考えても現実的には無理だからとプロ野球に進みたいとは思っていなかった」。それよりも先々、どうやって社会に出ていくかを考えて、岐路の選択をすべきだと。「つまり、先のことを考えてどれかを選ぶのではなく、先の先、次の次をどう選ぶかを考えて、それなら今はこれを選ぶべきだと決める。僕は野球推薦で一流企業に就

職したいと思っていたので、その選択ができるような大学に行きたかった。強いチームに入るより、自分が出場できる機会が得られるかどうかが一番重要なんです」。そうやって彼は「自分の場」を作る。

高2の夏。川上憲伸を擁する徳島商業と対戦し、延長戦の末に敗れ、甲子園を逃した。高3でチームのキャプテンを任された。最後の夏は公式戦で県大会3回戦敗退。

卒業後は、18歳から仕事をしたくないという理由で両親の賛成を得て大学進学を希望。志望校は駒澤大学。ところが別府大附属高校の城島健司が駒沢大に進学するという情報を聞き、駒沢進学を断念。「彼が一緒だと試合に出られない可能性があるから。試合に出られることが一番なので」志望校を変更し、野球部が強く、しかも出場の機会がありそうな帝京大学に進学。ちなみに城島氏はその後、福岡ダイエーホークスから強行指名を受けプロ入り。大学進学はしなかった。

野球しか知らなかった少年が徳島から東京に上京したときの感想を聞いてみる。

「東京なのに東京じゃなかったんです（笑）。寮は相模湖（神奈川県相模原市）で、最寄駅は相模湖駅。おまけに駅からバスで20分くらいの場所。東京のかげら



もなかったです(笑)」

のどかな風景が広がるエリアでの4年間の寮生活は、毎日グラウンドに通い、グラウンドとの往復に明け暮れた。

首都大学野球連盟に所属の帝京大学。里崎さんが入学する前は71年と86年にリーグ優勝をしているだけで、優勝から遠ざかっていた。

2年の春から捕手のレギュラーになり、22季ぶりに優勝に貢献した。

その後、明治神宮野球大会で初スタメンの日にホームランを打ち、4試合連続ホームランというリーグタイ記録を樹立。ベストナインも3回受賞している。

「東の帝京に里崎ありと言われてました(笑)。ただ、僕は自分が試合に出やすいところを選んで自分の身を置いていまして、自分の夢や目標を掴み取るた

めの場所はどこだろうと探して、選んで、そこに自分を置く。だから活躍できた」

一流企業に就職することを見据えて高校や大学を選んできた彼だったが、98年のドラフト会議で千葉ロッテマリーンズから2位指名を受けた。

「松坂世代です。社会人や大学生は、球団と思われながら逆指名ができた頃です」

指名は受けたものの、当時は万年Bクラスだったロッテという球団のどこに魅力を感じたのだろうか。

「一番早く指名してくれましたから。それに、どの球団かより、試合に出られるかどうかが重要なので。補欠ではお金にならないし(笑)。強いところより自分がレギュラーになれるところですよ。当時の帝京野球部の宮台俊郎監督も「チャンスがあるところへ行け」と、高橋監督と同じことを言っていました」。それが里崎さんの、人生をどう歩むかの哲学。

ドジャース・大谷翔平選手のチームの選び方も同じだと言う。

「最初にエンゼルスを選んだのは弱いチームだったからです。弱いから2刀流をやらせてもらえた。自分がやりたいことができるチームを選んで、結果を残して、次は強いドジャースを選んだ。もちろん、補欠でいいから名門にいたいと

いうのも一つの考え方ではあるけど、僕は違う」

連敗ばかりで万年最下位、名門ではなく入口は低くても出口を高めるための貢献をしたから、大きく飛躍した今がある。そんな里崎さんにとって、野球とは何なのか。意外な答えが返ってきた。

「僕の中で野球はずっと遊びの延長なんです。子どもの頃は昼休みや放課後の遊びだし、大学の4年間もそうでした。体を動かすことはイコール野球でイコール遊び。だから毎日遊んでばかりいられて楽しかったですよ。でも今の時代って、何か運動を始めると、親も一緒になって五輪を目指すとか大きな目標を持ってやりますよね。遊びじゃない。すごく真剣。それが悪いとは思わないけど、強いことが善かというところじゃないと思ってるから」

努力しても報われないことも多い。それでも努力したことに對する拍手や賛辞はもらう。けれど里崎さんにそんな賛辞は不要だ。報われるための場をリサーチし、1番になれるレースを選択して最大の努力をする。

「いえ、努力はしてません。努力なんて世の中にはないと思ってます。野球が上手くなるために頑張ることは努力じゃなくて、僕にとっては必然だった。実際、僕は自分が頑張っていると認めたことはないのですから」

彼の脳は優れた情報分析力を持ち、里

崎智也というキャラクターを駆使して人生ゲームを面白がっている：結果、智也少年は少年のまま前に進み続ける：そんなふうにはさえ感じてしまう。

徳島とも関わりを深める。鳴門市のスポーツアドバイザーを務め、県外や海外チームの合宿を誘致したり、アンダー9（10歳以下）の少年野球大会に関わった。

徳島には「ちょこちょこ帰って」、その度に空港からほど近い実家に寄って「ご飯食べます」

孝行息子にほっこりする。子どもの頃、食事は必ず正座して食べた。

「うちはそういうところに厳しかったですね。毎食ずっと正座です。野球部で正座させられることもあったけど、僕には全く通用しないというか苦痛じゃなかった（笑）。うちは畳のへりや敷居を踏んだりするとすごく怒られるような家庭でした。考えてみたら、親に褒められたことはないです」

今、自身も双子の父だ。「キャッチボールはしても、野球は教えません。教えることがあるとしたら、自分が一番になれるレースに出れば良いということですね」

そんな里崎さんに今の夢を聞いてみた。ちなみに、プロ野球を引退したとき

夢を聞かれて「プロ野球でも1億、やめても1億稼ぐこと」と答えている。

「周りから笑われるくらいの目標だったけど、達成しました。今は、労働しないで1億稼ぐことが目標（笑）」

では、少年時代の将来の夢は？

「作文で書かされたことはあるけど、テキストにしか書いてないから覚えてません（笑）」

19年開設したSatozaki Channelは登録者数約80万人、総再生回数6億回を超えるユーチューバーとしても活躍中。

「YouTubeは自分の存在感や立場を担

保できるのがいいですね。どこかの孫請けとかだと言いたいことが言えなかったりやりたいことができないことがあるじゃないですか。でもYouTubeは誰に付度するでもなく、自分を通せる」

番組で、副音声の依頼を受けることも多い。スカッとした物言い、それでいて憎めない発言が視聴者を惹きつける。

お茶目でやんちゃな智也少年は、自分を生かせる場がどこか、熟知している。向かう先は…

（取材・文／北島由記子 写真／永井守）

